

令和6年度 奈良県立青翔中学校・高等学校 学校評価総括表

【中学校・高等学校用】

年度	令和6年度（中期計画3年目）
本校の使命 (スクール・ミッション)	中高一貫6年間を通した理数教育の推進により、地域に貢献するとともに、科学技術創造立国たる日本の未来を牽引するサイエンスイノベーターを創出します。
年度重点目標	科学技術人材育成に向けた探究的な学びと授業改善の推進

1 スクール・ポリシーの内容

入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー)	自然科学の分野で社会に貢献できる人材の育成を目指し、以下のような生徒を求めます。 (1) 科学的な現象を探究しようとする意欲をもち、物事を論理的に粘り強く考えるための土台となる数学が好きな生徒 (2) 将来、科学研究活動を通して社会に役立ちたいと願い、実験・観察や理科に興味・関心をもち、自ら進んで課題の発見や解決に努めようとする生徒 (3) 基本的なコミュニケーション力を身に付け、仲間と協働できる生徒
教育課程の編成及び実施に関する方針 (カリキュラム・ポリシー)	中高一貫6年間を通した理数教育を、以下のように推進します。 (1) 全校体制での探究的な学びの充実 (2) STEAM教育の視点に立った教科等横断的取組 (3) SDGsを活用した地域課題を解決するための自治体・企業等との連携 (4) 中高一貫理数教育の特色を生かした体系的カリキュラムの編成 (5) 高次の研究を実現させるための国内外の大学等との継続的な連携 (6) 異学年集団の学びによる科学的リテラシーの習得
育成を目指す資質・能力に関する方針 (グラデュエーション・ポリシー)	サイエンスイノベーターとして必要となる、以下の資質・能力の育成を目指します。 (1) 課題発見・解決・設定に必要な創造的思考力 (2) 科学的根拠に基づいた総合的判断力 (3) 多様な考え方を尊重しチームで協働するコミュニケーション能力

2 奈良県教育振興基本計画（「奈良の学び推進プラン」）が示す各テーマごとの学校教育目標

テーマ	学校の教育活動に関する目標(A)	計画期間における具体的目標(B)	令和6年度末の目標値等(C)	令和6年度末の状況(D)	自己評価(E)	学校関係者評価(F)	改善方策
(1) 心身ともに成長を促す	基礎的な体力の向上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が30%以上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が30%以上	・スポーツテストの結果、A・B判定を合わせて30%を超えたのは、男子が高1(37.8%)のみ。女子は中2以外の全ての学年で30%を超えている(中1:56.7%、中3:31.0%、高1:36.1%、高2:35.1%、高3:30.3%)。男子の体力向上が課題である。昼食後の休み時間にグラウンドを使用しサッカー等を行う生徒が増えスポーツに親しむ様子が見られる。	B	B	・教科体育の授業や体育大会や球技大会等の学校行事を通して体を動かすことやスポーツに親しむことで体力の向上につなげる。
	望ましい生活習慣の確立	朝食摂取率が90%以上 睡眠時間6時間以上が80%以上	朝食摂取率が90%以上 睡眠時間6時間以上が80%以上	・朝食摂取率はアンケートより中1(89.5%)、中2(89.8%)、高2(88.2%)が90%近くであり、他の学年でも80%を超えている。6学年の平均は86.7%であった。しかし、「食べない」生徒が各学年数名いた。 ・睡眠6時間以上は中2(86.0%)のみ80%を超えており、次いで中1(74.9%)、中3(73.7%)である。6学年の平均は66.1%であった。また、中1では4名ほどが5時間に満たない回答であった。高2、高3は受験勉強等もあり睡眠時間は少ない。	B	B	・朝食に関しては年2回の三者懇談時に掲示物で啓発を行ったところ、関心を持たれた保護者もいた。全保護者に見ていただけるようにメール等での配信も必要である。 ・睡眠時間についても家庭での声かけが重要であると考え、心身の成長や学力に大きく関わることを理解していただけるよう朝食同様三者懇談での啓発やメール等での配信を考える。
	自身の健康管理	歯科検診などの治療勧告後の受診率が80%以上	歯科検診などの治療勧告後の受診率が80%以上	・三者懇談等での呼びかけの結果、歯科の受診が134名中71名で53%と12月時点より増加した。眼科は78%となっている。	B	B	・保健の授業や保健便りや生徒本人に健康について考えさせるとともに、三者懇談やメールサービスを利用して保護者に直接声かけをし受診を促す。特に歯科は痛みが出るまで放置すると治療に時間がかかるため早期の受診を促す。
(2) 学ぶ力、考える力、探究する力を高める	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」の肯定的な回答が70%以上 生徒の意識調査の「自ら取り組む姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答が80%以上	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」の肯定的な回答が70%以上 生徒の意識調査の「自ら取り組む姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答が80%以上	・授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」という質問について、肯定的な回答は71.2%であった。 ・SSH意識調査より「自ら取り組む姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答は、75.1%であった。 ・「探究的な学びに関する授業改善シンポジウム」を実施した(11月)。	B	B	・授業アンケートの結果を、教員の自己評価の材料とし、更なる授業改善を推進する ・主体的、対話的で深い学びをターゲットにした公開授業を行う。
	学習意欲の向上	ジェネリックスキルテストの学習意欲に関する領域の得点を伸ばした生徒が50%以上	ジェネリックスキルテストの学習意欲に関する領域の得点を伸ばした生徒が50%以上	・ジェネリックスキルテストのうち、学習意欲に関連する領域(自己調整力と論理性)の得点を伸ばした生徒が59.7%で、目標を達成している。	A	A	・学習意欲の更なる向上に向けて非認知能力を高めるための授業展開を各教科で検討する。
	探究的な学びの推進による、主体性、独創性の養成	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに70%以上	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに70%以上	・SSH意識調査より自主性、独創性が身に付いたという回答は70.1%であった。	A	A	・生徒による相互評価活動について各教科で実施し、更なる充実を図る。 ・探究科学のテーマ設定や研究内容を更に深める。
	学校における働き方改革	学校行事を精選・マニュアル化し、教員の業務を軽減する	学校行事に関するマニュアルを2つ以上の行事で作成する	・次年度以降も継続して活用できる高校及び中学校の新しい研修旅行に関するマニュアルをそれぞれ作成することによって教員の業務軽減につなげた。	A	A	・行事の精選とマニュアル化をすすめ、更なる業務の効率化と軽減を図る。
(3) 働く意欲を高める	インターンシップの充実と産業界との連携	中学校職場体験及び高校インターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「良かった」という回答が80%以上 上、職場見学や企業の実践等に関する講演会の実施で「良かった」という回答が80%以上	中学校職場体験及び高校インターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「良かった」という回答が80%以上 上、職場見学や企業の実践等に関する講演会の実施で「良かった」という回答が80%以上	・「良かった」の回答は、中3進路講演会が88%、高1進路講演会が85.7%、中3キャリアセミナーが92.8%、中2職場体験が100%、高校インターンシップが100%(今年度の夏のインターンシップ及び看護体験参加者は合わせて5名) ・最終学年在籍生徒数(65名)に占めるインターンシップへの在学中の参加生徒数は7名	A	A	・高校ではインターンシップやキャリアセミナーへの参加を積極的に促すことにより、高い進路目標を早期に決定するきっかけとさせる。 ・中学校では職場体験の受け入れ先を更に充実させ、普段の学校生活では体験できない経験を多く積ませる。
	キャリア教育の推進	社会への参画を見据えた大学や企業での研修・共同研究の実施 筆記試験だけに頼らない総合型・学校推薦型選抜に出席する生徒の割合を20%以上	社会への参画を見据えた大学や企業での研修・共同研究の実施 筆記試験だけに頼らない総合型・学校推薦型選抜に出席する生徒の割合を20%以上	・中高とも学年別による進路講演会の実施 ・京都大学見学会の実施 ・地元企業との協働による商品開発 ・奈良先端科学技術大学院大学のチャレンジプログラムへの参加 ・国公立大学の総合型・学校推薦型選抜に出席する生徒の割合が35.4%	A	A	・大学や研究機関、地元企業との連携を更に深め、生徒のキャリア意識を高める。 ・進路講演会の内容を適切かつ充実させ、より高い進路目標を実現しようとする意識を持たせる。
	ジェネリックスキルの伸長	STEAMの観点を加えた本校独自のジェネリックスキルテストを開発し、生徒の非認知能力の向上を図る	ジェネリックスキルテストにおいて総得点を伸ばした生徒が40%以上	・ジェネリックスキルテストにおいて総得点を伸ばした生徒が60.0%であり、目標を達成している。	A	A	・ジェネリックスキルテストを活用して非認知能力の向上を図り、生徒個々の状況と6年間を見据えた指導を教員間で情報共有をする。
(4) 地域と協働して活躍する人を育てる	地域の課題を発見し、解決する力の養成	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに80%以上	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに80%以上	・生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答(元々高かったという回答を含む)がそれぞれ70.7%、71.8%であった	B	B	・御所市、地元企業の講演会だけでなく、見学やワークショップなどを通じて課題に取り組み、課題発見力、課題解決力を高める。
	海外交流校等との協力による国際性の養成	生徒の国際性が身に付いたという回答が60%以上	生徒の国際性が身に付いたという回答が60%以上	・生徒の国際性が身に付いたという回答(元々高かったという回答を含む)が43.8%であった	B	B	・希望者対象にタイ研修を計画。参加した生徒は全校生徒に向けた報告会を実施し、全校生徒への成果普及を目指す。 ・海外の高校と共同研究の計画を行う。
(5) 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	発達段階に応じた人権教育の推進	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を実施	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を各学年2回実施	・発達段階に応じたHRや行事は、各学年2回以上実施できた。 ・人権講演会は、「聴覚障がいを感じる」という演題で11月13日に実施した。	B	B	・中高一貫教育校の良さを活かした行事や活動を更に推し進める。 ・人権講演会の演題決定に生徒アンケートの結果を反映する。
	学校いじめ防止方針に基づく取組の推進	「いじめアンケート」や「心と生活に関するアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談(年間2回以上)の実施及び職員間の情報共有の推進	「いじめアンケート」や「心と生活に関するアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談(年間2回以上)の実施及び職員間の情報共有の推進	・今年度も年間2回以上の個人面談を実施することができた。「いじめられている」と書いた生徒に対する面談や、継続的な見守りとフォローこそが神経を使うところであり、大切にしなければならぬことである。生徒情報共有シートへの記入もできた。	A	A	県からのアンケートはフォーム回答となっているが、学校独自のアンケートの方は記名式の記述式としている。果たして、担任の先生方の手間を考えると、紙媒体が本当にいいのかどうか検討の余地があると思われる。
	個別の教育支援計画や個別の指導計画の活用	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談(年間2回以上)の実施	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談(年間2回以上)の実施	・要配慮生徒一覧の作成に加え、必要に応じて生徒の状況や支援について適宜職員全体で情報共有を行った。 ・対象生徒の保護者と、年間2回(1学期・2学期3者面談時)、個別に面談を実施した。	A	A	・特別支援教育支援員との連携を更に充実させ、個別最適な学びの実現を目指す。 ・特別支援教育の見識を深められるような職員研修を企画し、支援を要する生徒を含めたすべての生徒への指導に役立てる。

※(E)・(F)の評価基準…A:十分達成できている B:概ね達成できている C:改善が必要である

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

中期計画(3年目)の目標値を概ね達成しているが、本校のSSH事業の更なる充実に向け、国際性の育成が今後の課題としてあげられる。また、生徒の健康維持・増進に向け、体力の向上と睡眠時間の確保、検診に関する治療勧告後の受診率向上について改善が必要な状況である。健康な体づくり、基礎的な体力の向上と望ましい生活習慣の確立に向けて、日頃から運動や健康管理に関する生徒への意識付けを図るとともに、保護者への協力を様々なツールを活用して促していく。学校満足度については、「本校に入学して(させて)良かった」は、「とてもそう思う・そう思う」の回答が、生徒は77.7%(昨年度:78.5%)、保護者は93.2%(昨年度:88.7%)であり、保護者の満足度が向上している。